

とやの潟環境遊覧イベント 2014.6.21-22

主催:とやの潟環境舟運実行委員会



船に乗って水辺への理解を深めるイベント「とやの潟環境遊覧」が21、22の両日、新潟市中央区の鳥屋野潟で開かれた。親子連れらが潟の上から周辺の景色を楽しみ、環境保全の重要性を考えた。

鳥屋野潟

親子連れら
遊覧楽しむ

船に揺られて水辺理解

船の上から鳥屋野潟周辺の景色を楽しむ参加者。21日、新潟市中央区

市南商工振興会やNPO法人新潟水辺の会などでつくる実行委員会が初めて企画した。自然を体感することで環境問題への意識を高めてもらうことが狙い。

遊覧には、阿賀町の阿賀野川ライン下りに使われる船が用意された。鳥屋野潟南部の新堀河口を出発し、潟の中心部で折り返す約25分のコースで実施。2日間で約千人が参加した。

22日は小雨の中、多くの親子連れらがライフジャケットを着て乗船。船上では、潟の在り方を調査・研究する市の機関「潟環境研究所」所長の大熊孝・新潟大名誉教授らが案内役を務めた。

大熊さんは鳥屋野潟の地形について「水深が50センチほど浅く、水面は海より3センチ低い」と解説。かつて生活の中で潟の水を使っていたとして「子どもたちが水辺で遊べるように、潟を宝物としてきれいにしないといけない」と呼び掛けた。

子どもたちは窓の外を見ながら「魚がいた」「ピツグスワンがすぐ近くにある」と笑顔で写真を撮るなどして楽しんだ。

新潟市東区の会社員本田康博さん(39)は「潟の中からの町の光景を見るのは新鮮だった。身近に素晴らしい水辺環境があると再認識できた」と話した。



- 写真右上・下 / 湖上を走る2艘の遊覧船 加藤氏撮影
- 写真左 / 公園橋から河口港の遊覧花船と板合せ花木舟をスマホで撮影

- 写真上／とやの潟に流れ込む新堀排水路と右岸の棧橋、待合、森の中の本部
- 写真中／花の客船の白鳥号 ● 写真下／花の板合せ（地元呼称の木舟）



2012年6月21日(土)、22日(日)の2日間、新潟市のと真ん中にある約200ha弱の鳥屋野潟（とやの潟）で20人乗りの客船を2艘、約30分潟の環境を体感する湖上遊覧イベントを実施しました。

下の集合写真は、とやの潟環境舟運実行委員会（9団体+協力3団体）の実行メンバーの笑顔です。

初日21便、2日目46便、計47便で約1100名の湖上遊覧体験を無事終了しました。後日、水辺の会の取材陣が撮影した映像がYouTubeにアップされると思います。

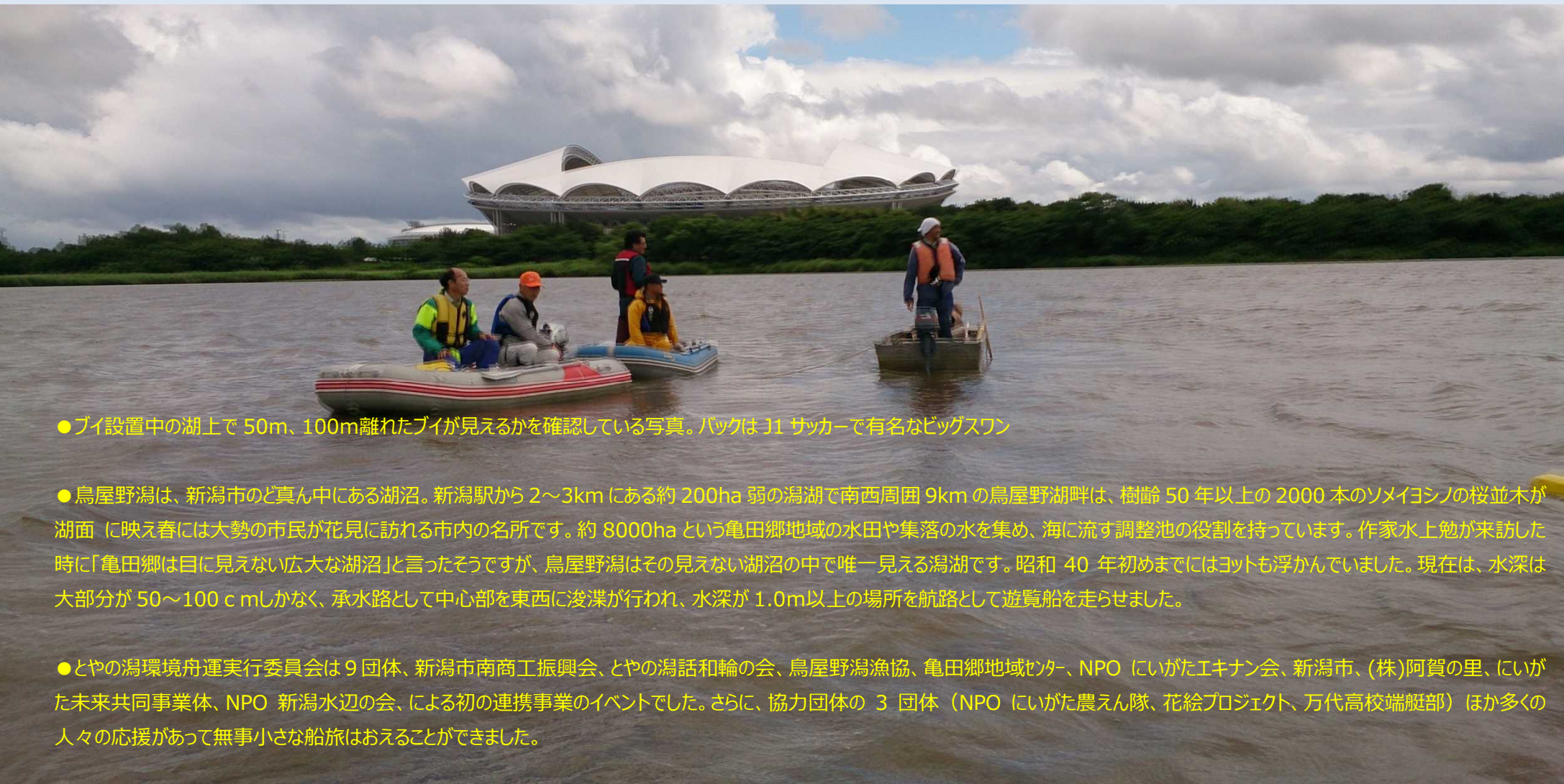
今回の最大の収穫は、下記の写真のように、高校カヌー部と木舟を操る漁協の方々との接点、農えん隊と花絵プロジェクトチームなど普段接点のない人たちの異業種、異能人交流でした。

取り急ぎスマホで撮ったボケ写真（一部湖上で写真 ▶加藤氏）をご覧ください。





●写真左／航路のブイ設置作戦会議 ●写真中／ブイ(2L ペットボトル 2 本を黄色のガムテープで一体に) と砂袋 ●写真右／ブイ設置の舟(5 馬力アルミ舟 1 艘、2 馬力ゴムボート 3 艘)



●ブイ設置中の湖上で 50m、100m離れたブイが見えるかを確認している写真。バックは J1 サッカーで有名なビッグスワン

●鳥屋野潟は、新潟市のど真ん中にある湖沼。新潟駅から 2～3km にある約 200ha 弱の潟湖で南西周囲 9km の鳥屋野湖畔は、樹齢 50 年以上の 2000 本のソメイヨシノの桜並木が湖面に映え春には大勢の市民が花見に訪れる市内の名所です。約 8000ha という亀田郷地域の水田や集落の水を集め、海に流す調整池の役割を持っています。作家水上勉が来訪した時に「亀田郷は目に見えない広大な湖沼」と言ったそうですが、鳥屋野潟はその見えない湖沼の中で唯一見える潟湖です。昭和 40 年初めまでにはヨットも浮かんでいました。現在は、水深は大部分が 50～100 cm しかなく、承水路として中心部を東西に浚渫が行われ、水深が 1.0m 以上の場所を航路として遊覧船を走らせました。

●とやの潟環境舟運実行委員会は 9 団体、新潟市南商工振興会、とやの潟話和輪の会、鳥屋野潟漁協、亀田郷地域センター、NPO にいがたエキナ会、新潟市、(株)阿賀の里、にいがた未来共同事業体、NPO 新潟水辺の会、による初の連携事業のイベントでした。さらに、協力団体の 3 団体 (NPO にいがた農えん隊、花絵プロジェクト、万代高校端艇部) ほかに多くの人々の応援があって無事小さな船旅はおえることができました。



- 写真上／新堀の河口を、とやの潟にから帰港する遊覧船。栈橋には安全サポートのボランティアスタッフが待機
- 写真下／花で飾った花船の2艘。右が『さくら号』、左が『白鳥号』、漁協の安全監視船も待機。





- 写真上／とやの潟航路を走り、潟のど真ん中を目指してゆったり走る遊覧船。対岸は小張木地区の住宅のようす。手前の茶色の管は浚渫泥水を陸に圧送するパイプライン
- 写真下／上の写真を引いて撮ったもの。かつてはこのヨシ原もなかったという。次第に水面が減少しているようす





● 写真上下／船の屋根にヘギ花箱、脇にはハンギングバスケットの花。船内から景色が見えて、船頭さんの操船に影響ないデザインとしている





●写真上下／乗船客の乗下船時をサポートする浮棧橋







●写真左／船の中でガイドする村尾氏、その左が小野氏、鳥屋野潟でシジミが採れたころ、湖面の白波が見えたころ、対岸まで泳ぐのが青春儀礼だったころなど豊かな時代の潟の話が次々に飛び出す

●写真下／船の中では2列にすわる。窓際に浮き輪にもなるマットがある。大人で24名収容できます。今回は全員ライフジャケットを着てもらい20名を目途に乗船してもらった





●写真／船の屋根が花箱で重いというので、板合せに満載し、さながら花売り舟と化したようです



●写真／板合せの花舟と遊覧船の花船がにぎわいを醸し出します。河口には花カヌーも走ります





● 写真左右／橋の下を潜り抜ける花カヌーが走ります



● 写真 3 枚 / スタッフを乗せて遊覧する花舟板合せ。漁協の組合員が子どものころから遊びで会得した櫂の操作。でも高校生のカヌーにも興味しんしんでした





●写真/いくとびあ食花の広場に設置した、乗船受付から誘導されて河口港の本部に来て@乗船券つきガイドマップをもらう客。



●写真左右/ボランティアスタッフがライフジャケットを丁寧に装着サポート
子供用、大人女性用、大人男性用、赤ちゃん抱っこ用と対応中





- 写真上／さら号便か白鳥号便かを確認して待合テントへ。海より3 m低い、を開設する看板
- 写真左／市の環境対策課の職員が水質の説明をしている

● 写真右／スタッフが瀉の環境や乗船の心得などを面白くガイダンス。乗船前でガイドのスタッフも待機。

日本海の高さを示す柱も立っている

● 写真下と右下／1列に並んで乗船。初めて船に乗るといふ子供たちはどきどきするらしい





● 写真上／万代高校端艇部のクラブ員が操船する花舟板合せ ▶ 漁協のMさんはこれで後継者が出来たと大喜び

● 写真右上／栈橋からみた待合tentのようす

● 写真下／ヨシの葉で草笛を鳴らす漁協のMさん。長年の遊びで覚えた草笛にききほれるスタッフ





● 写真上／帰港する遊覧船、 ● 写真下／浚渫パイプラインの向こうから回遊する船と、伴走するカヌー





とやの潟環境遊覧 無事 1100 名の旅終了

FINE